

# 職業人生40年を回顧して

西 山 茂

『商学討究』に寄稿する回顧なら話は自然と小樽商科大学に在職した25年余の思い出になるところだが少し遡って前史から書き始めたい。

1978年の春、私は当時の経済企画庁、現在の内閣府という官庁に入った。いわゆる「官庁エコノミスト」になろうと思いついた、といえば印象はいいが、実は偶々そうなのである。

というのは、慶応の修士課程から博士課程—当時は博士前期課程を修士課程、後期課程3年を博士課程という名で呼んでいた—に進む予定でいたところ、2年次の秋の終わり、父の胃に癌が見つかった。ゆっくり研究を続ける状況ではなくなり困り果てた私は恩師である小尾恵一郎教授に相談した。そうすると『君の年齢を考えるといまから仕事を探すのは難しい、公務員試験は考えているのか？受けてみるといいヨ』と言われた。ちょうど経済企画庁の参事官を辞めて学習院大学で教えている佐倉致さんが慶応に非常勤講師で来ているから色々教えてもらいなさい、と。大変漠然とした示唆であったが、これが職業人生40年の出発点につながった。

役所には14年間在籍した。経済白書、GDP統計、円借款など色々な仕事を担当した。その後の研究との関連を考えると、やはり産業連関表(昭和55年表)の作成業務が意義深い。私は経済研究所にいた。それは行政管理庁(当時)ほか関係11省庁の共同作業であり、省庁間の計数調整が面倒で細かな仕事だった。偶々、北海道庁から出向で来ていた真藤邦雄さんと相談しながら夏の猛暑も忘れて作業に没頭した毎日が忘れられない。年度末には三重県鳥羽市であった研

修会議へ二人で出張し骨休みをしたものだ。意気投合して次の夏には真藤さんと二人で石垣島に旅行し周辺の島々に遊んだ。瓶に入れたその時の「星の砂」は今でも側の書棚の一隅にある。

二度目の経済研究所勤務でGDP統計を再び担当していた頃のある日、大阪大学に出向する話がある、社会経済研究所だ、君はどうすると打診された。私は即座に行きますと返答した。1989年のことである。

当時の社会経済研究所では森口親司教授が所長を務められていた。

大阪では、統計局から借り受けた「全国消費実態調査」個票データの分析をやった。これは数名が参加する科研費プロジェクトになった。偶然ではあるが、慶応の先輩である牧厚志教授が社会経済研究所の客員研究員に任命され定期的に大阪に来ることになった。それで牧さんもプロジェクトに参加したのである。私は先ずマクロとミクロの消費関連データにどの程度の不整合が発生しているかについて細かな計算をした。その不整合が発生するメカニズムをどのようにモデル化するかについて文献を探しながら牧さんと二人で議論した。

ところが大阪での研究が中盤にさしかかった頃、今度は母が病気に斃れた。

大阪大学出向は2年の約束で、その後はまた役所に戻る予定であった。もしも母が病気になるなければ当然ながら私は東京へ戻っていた。そうすれば大学で研究を続けるという人生からは離れていったに違いない。

牧さんと共同で進めている研究はまだ中途半端であった。その辺りの事情を考慮して下さったのかもしれない。森口所長から「大学のポストを探して研究を続けてみないか」と聞かれた。そのうち久我清教授から「旧知の今喜典さんから聞いた話だが小樽商科大学で数理統計学の教官を公募しているようだ、応募してみませんか、北海道はいいですよ」と伝えられた。社会経済研究所で3年目に入っていた。

岐路だった。北海道に移り研究・教育をライフワークにする生活を想像した。母の死を受け止めきれず再出発したいという気持ちもあった。小樽商科大学へ応募し採用されると経済企画庁にはもう戻りませんと伝えた。

私はこんな歩みを経て1992年の春、本学商学部経済学科助教授の辞令を山田家正学長（当時）から交付された。大学から地獄坂を下り突き当りの公園で右へおりた所の左側の一角に今はもう取り壊された官舎があった。その中の一階に入居して私は北海道での生活を始めた。そしてやがて担当する数理統計学の授業も始まった。当時の覚え書きを読み返してみるとこんなことを書いている。

4月27日（月）晴れ。昨日は午前中子供部屋の模様替えを行う。本日午前中に印刷を依頼していた挨拶状のゲラを校正。数理統計学の3回目の授業。二項分布を説明したが、初年度はやはり難しい。時間配分が体に浸み込んでいない。役所の仕事であれば、進捗速度が課題ごとに直感的にわかるが、新しい事柄はその都度頭で判断しないと駄目である。相当の疲労を感じる。

最初の授業の際の記憶は案外に薄れてしまった。が、かなり力んでいたのだろう。中々思う通りに授業がはかどらず、胸の奥で意気消沈する時期がやがてやってきた。覚え書きのページをめくっていると、こんな下りがあった。

またこの黄昏時に若葉萌えいずる白樺林を過ぎ来たりしが  
日は暮れ星斗しきりにふりはじめるなか  
緑が丘を歩み下りてつつましき小宅にかへらむとす  
さすれば我が心より暗くうち沈みたる小樽の海は宝玉の如く燦めきた  
るをはじめて知りぬ

書いた日は5月7日（木）になっている。小樽の街の夜景の美しさに初めて気がついたようだ。着任前、伊藤整の『若い詩人の肖像』を読んだからか、その気分を真似てみようと思ったものと推察される。北国の遅い桜が散ってまだ町の角々に花が咲き乱れる時節が到来する前である。こんな風に毎日を過ごしたことはそれまでになかった。私は平穏を感じ癒された。

授業では苦闘していた反面、大学に戻ったからには研究の方でこれだけは解明したいという問題が三つあった。

第一は大阪から持ってきた問題、つまり「マクロデータとマイクロデータの整

合性」という問題だった。これは小樽に来てから分析結果を“Misreporting Model”の拡張という形でまとめ、学会や専門誌に公表して一応の方をつけることができた。

第二の課題は将来予測に関連する。たとえばGDPの中の消費支出を四半期別に推計する際、速報段階では基礎データとなる「家計調査」の当該四半期3か月目が利用できない。そこで3か月目の値を予測する。実績値ではなく予測値を一部で使っているので「速報」と言うのだが、その予測方法が問題だった。ところが、ちょうどその頃、日経・経済図書文化賞を受賞して高い評価を得ていた山本拓『経済の時系列分析』を読んでこの問題は自然に氷解してしまった。それまで私は計量経済モデルといえば内生変数及び外生変数双方を含んだ同時方程式体系のことでありと決めてかかっていた。ボックス・ジェンキンス流の時系列分析には蒙を啓かれる感覚を覚えたものだ。ビジネススクール開学後の授業にもつながっていった。

最後の課題は季節調整に関する。たとえば設備投資推計の基礎データは『工業センサス』である。『工業センサス』は暦年データであるが、四半期系列を推計するには購入者側のデータ、主として『法人企業統計』を用いる。即ち、設備投資は暦年ベースで数値を確定したあと、異なった方法で推計された四半期系列に沿って暦年合計値を分割するわけである。季節調整済みのGDPが時に奇妙な動きをするのは、季節調整がうまくいっていない、というよりも四半期分割がうまくいっていないためである。この問題は意外に難しかった。季節調整法を精緻化するだけでは駄目で、暦年データを精度の劣る四半期データでどう分割するかを考えなければならない。

現実的にいえば、問題には賞味期限があるのかもしれない。最良の四半期分割と季節調整を考えているうちに、四半期GDP成長率は1パーセント未満の微小な数字になってきた。景気判断によく使われた「実質季調済前期比」の山と谷は推計に混在するノイズに埋没しているという指摘も出てきた。大学に持って来た三つの課題は、第一は一段落、第二は自然氷解、第三は時間切れ。どうやらそんな決算で終わったようである。

研究の思い出を綴ったからには教育についても触れておくべきだろう。ところが、教育について私には誇れるところが乏しい。実は、昨春に退職してからこんな述懐を覚え書きにしている。昨年10月2日の日付である。

『大学という場で研究をやっていると、同時に教育にも携わる必要がある。その教育が苦手だった。それは学生と心を開いてコミュニケーションをとることに面白みを感じる感性に欠けていたからである。研究仲間と会話をするには非常な面白みを感じるのに、レベルのまだ幼い若い人たちと話をするのに面倒くささを感じるのは、若い人たちへの愛情が欠けていたためだ。

研究につかされると、家に帰ってカミさんや子供たちと一緒に過ごすことを何よりも愛した。授業を担当し、連絡や調整はしても深い交流をしようという気にならない。とすれば、学生を教育し、育てることにはならない。当たり前である』。

だから学生諸兄には謝らなければならない。私は教師としては良い教師ではなかった。現在に至るまで交流が続いている諸兄もいるし、中には経済学科からビジネススクールに転じた後、ビジネススクールに入学してきた諸兄もいる。再会した彼らは私を「先生」と呼んでくれた。実に慙愧の至りである。愚弟賢兄というのが愚師賢弟である。私と接したことのある全ての学生諸兄の活躍と健康を今後も心から願ってやまない。

このように回顧すると、その時々で実に多くの様々な方の好意を受け、助けられ、眼前の問題を幸運にも解決できてきたことを知る。選択ではあったが、詰まりは私のしたいことをしてきたに過ぎない。しかるに恩返しは何一つ出来ていないのは偏に私の力量が足りないためである。暗澹とするとき『僕の前に道はない、僕の後ろに道は出来る』という高村光太郎の詩句を読むとひと時ではあれ慰めを感じる。今回、歩んだ道程をこうして書き記す機会を得られたのは誠に嬉しく感謝の念にたえない。